筑波大学　地域研究 20：1—17, 2002　　Area Studies Tsukuba 20：1—17, 2002

風の足跡——北シリア，アイン・ダラ神殿によせて

池　田　　裕

On the Footprints in the Temple of Ain Dara, Northern Syria

by Yutaka IKEDA

A large temple (38 x 32 m) dating from 1300 to 750 B.C. was unearthed during the excavations on the site of Ain Dara in northern Syria during the seasons 1980-1985. The temple is astonishingly similar to that of the Solomonic temple built on the mount of Jerusalem in the tenth century B.C. Among the most impressive in the site are four huge bare human footprints (97cm long each) carved into the limestone slabs lining the floor of the temple. This paper discusses the issue of the diety to be related to the footprints and its historical and cultural implication.

「南に向かい，北へ巡り，
巡りめぐって風は吹く。
風は巡り続けて，また戻る。」
（コーヘレト書１：６）

○秋のアフリン渓谷

10月ともなると，シリア北部のアフリン渓谷には秋の空気が強まり，シリア・トルコ国境検問所の山あい——その名もバーブ・エル・ハワ「風の門」という——を通って流れ込んでくる風も徐々に冷たくなってくる。アイン・ダラ遺跡は「風の門」の北およそ50km，シリア第二の都市アレッポの北西70km 地点にある（図１）。

筑波大学大学院地域研究研究科／
Master's Program in Area Studies／

遺跡丘（テル）の西側にはアフリン川が流れ，北側の丘陵の背後にはトルコ国境をなす高い山々が続く（図２）。アイン・ダラは「ダラ泉」の意で，八〇〇ｍ離れたアフリン川のほとりの泉の名前に由来する。シリアはオリーブの産地として知られており，筑波大学と古代オリエント博物館が長年発掘調査を続けている中部のイドリブ地方からここアフリン渓谷まで美しい緑のオリーブ畑が延々と続く[1](図３)。肥沃なアフリン渓谷はオリーブだけではなくザクロの産地としても有名であり，10月に入ると地元のクルド人たちは――この地域にはクルド系住民が多く住む[2]――家族総出でこの赤い果実の収穫にあたる（図４ a-b)。一方のオリーブの枝の上でも，よく熟して油を沢山含んだ実が自分たちの収穫の番を待っている（図５)。

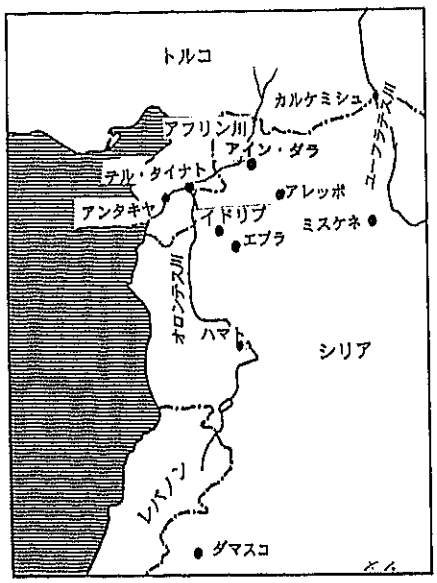


図１　北シリア，アイン・ダラ遺跡

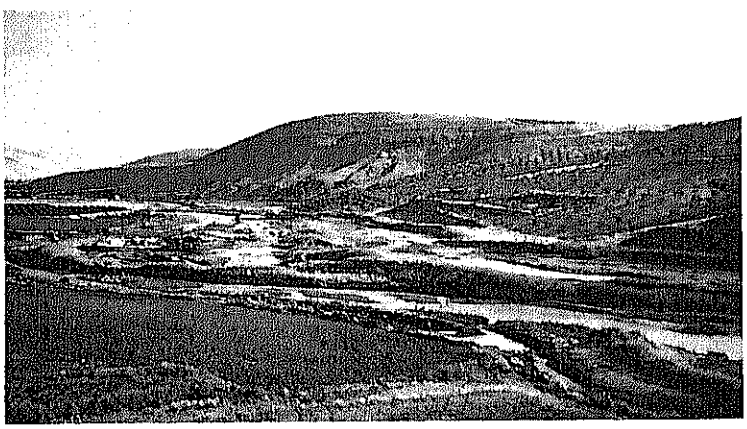


図２　アフリン川，北シリア。アイン・ダラ遺跡丘からの眺め。

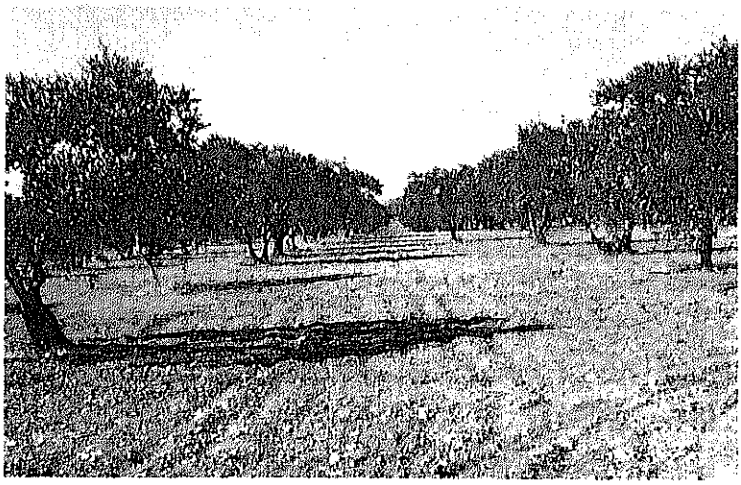


図3　どこまでも続くオリーブ畑　シリア，イドリブ地方

図4 a　摘み残されたザクロ　シリア北部，ジンデリス

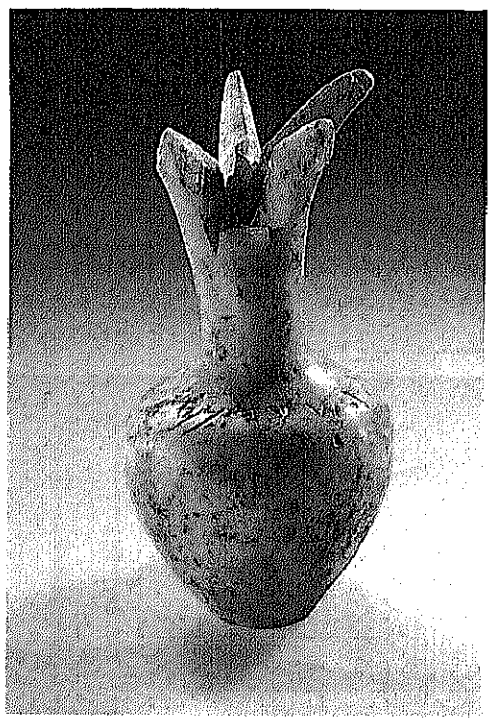


図4 b　ヘブライ語碑文のついたざくろ，象牙製
エルサレムのソロモン神殿の飾りの一部と考えられる　前8世紀

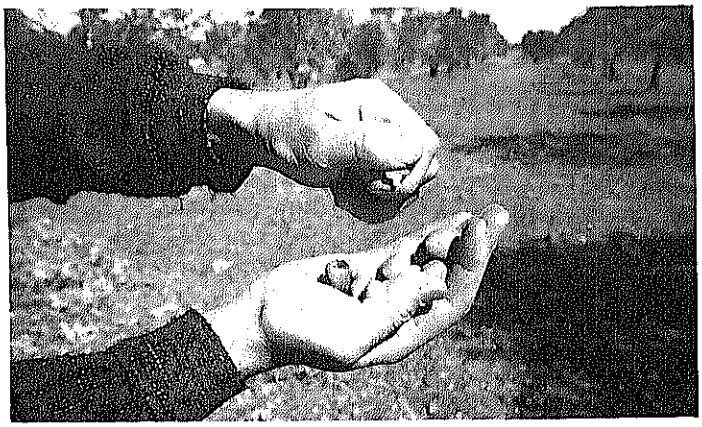


図5　収穫前のオリーブの実，指でつぶすと乳色の油分が出る
シリア，イドリブ地方

○アイン・ダラ神殿とソロモン神殿

アフリン渓谷を見下ろすアイン・ダラ遺跡は上の町と下の町とから成り，全体の面積は60エーカーに及ぶ。中心部を成す上の町は長さ270m，幅125m，高さ30m の大きな遺跡である（図6，7）。1954年，狐の巣を探していた羊飼いが石のライオン像の頭に躓いたのがきっかけとなって調査が始まったという。発見のエピソードとしては，群を離れた山羊を探しに行ったパレスティナのベドウィン（遊牧民）がユダ荒野の洞穴で，2000年前の聖書の写本巻物をはじめとするいわゆる「死海文書」を見つけたときの話に似ている[3]（図8）。調査の結果，発見されたライ

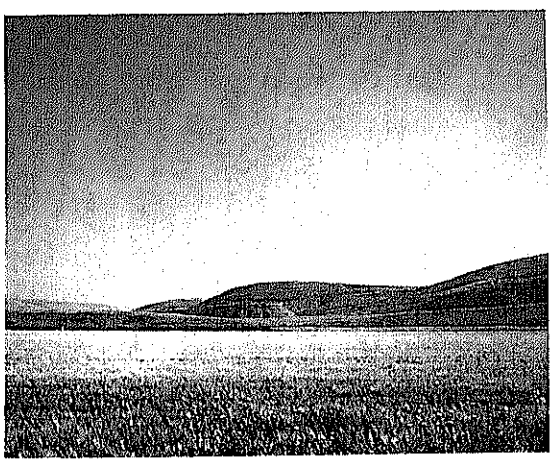


図6　アイン・ダラ遺跡遠望

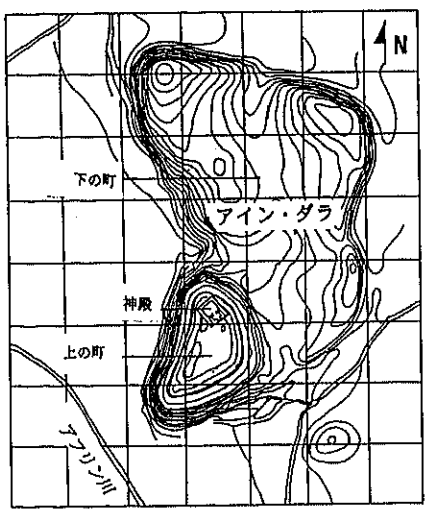


図7　アイン・ダラ遺跡。上の町は長さ270m，幅125m，高さ30m。

オン像は古代の町の門の一部であることが，また町の一番古い居住跡は6000年前まで遡ることが明らかになった。

1980年から1985年にかけて，シリアの考古学者たちにより遺跡丘（上の町）頂上で本格的な発掘が行われた。その結果，前1300—740年頃の巨大な神殿跡(38 x 32m)が出土した。至聖所，本殿聖室，前廊の三つからなるアイン・ダラ神殿の造りは，前10世紀半ばにソロモンが建て前586年にバビロニア軍により破壊されるまで存在したエルサレム神殿の造り（列王記上6：1-38)[4]と驚くほど似ていた（図9)。アイン・ダラ神殿が発見されるまでは，1936年にアイン・ダラ南西のテル・タイナト遺跡（現在はトルコ領に属する）から出土した神殿がソロモン神殿に最も似た神殿の例として取り上げられてきた[5]。アイン・ダラ神殿はテル・タイナト神殿よりもはるかに大きく，構造的にソロモン神殿により近いものであった[6](図10)。意外なことに，そ

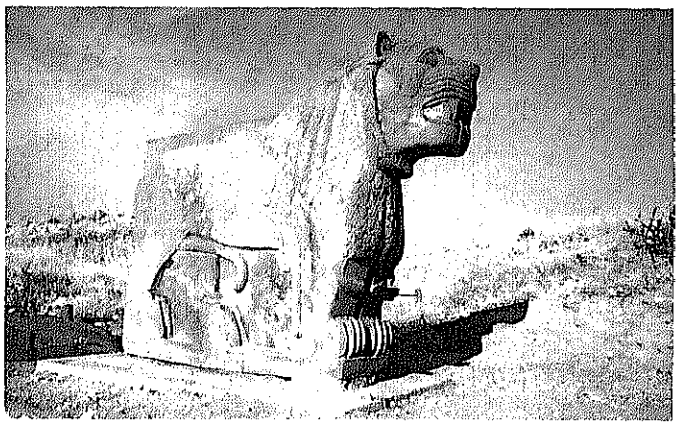


図8　ライオン像。アイン・ダラ遺跡

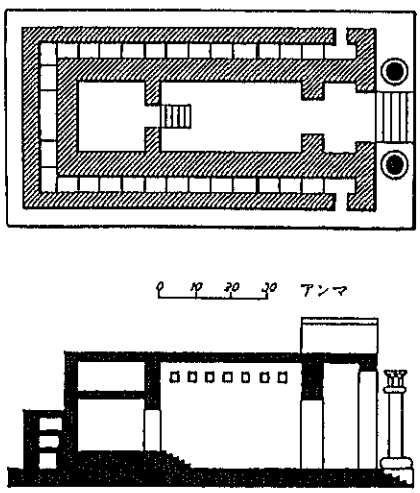


図9　ソロモン神殿

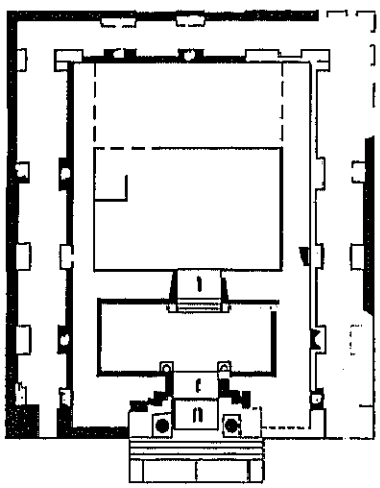


図10　アイン・ダラ神殿（38×33m)

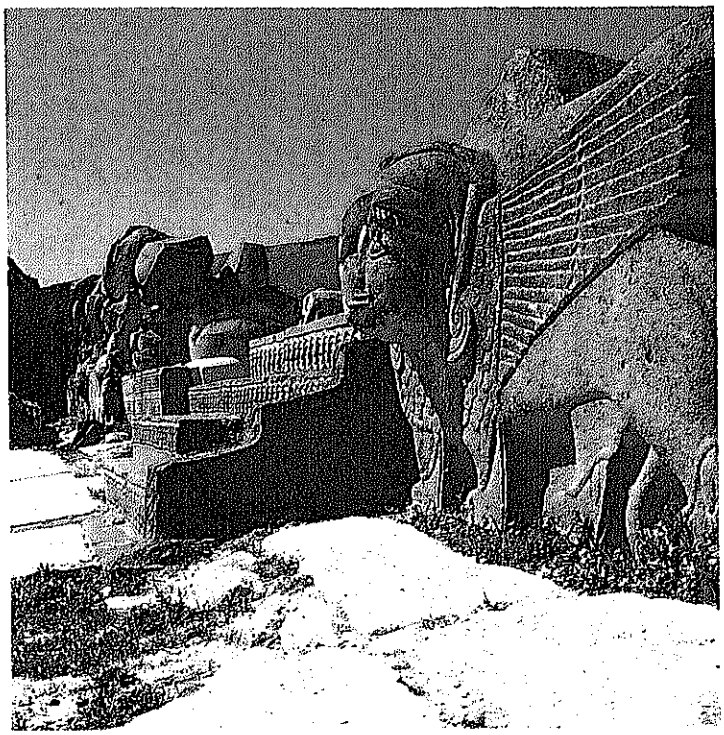


図11　アイン・ダラ神殿入口を飾るスフィンクス浮彫り，前900—740年

れほど重要な発見であったにもかかわらず，アイン・ダラ神殿は長い間人々の注目を浴びることがなかった。

アイン・ダラ神殿がわれわれの興味を引くのはソロモン神殿との類似においてだけではない。アイン・ダラ神殿の入口や前廊正面の壁を飾る黒い玄武岩のライオン，スフィンクスその他の浮き彫りには，新ヒッタイト，アラム両文化の影響を認めることができる(図11)。印欧系のヒッタイトとセム系のアラムという大きな二つの異なる文化や人々の共生や競合はユーフラテス川東岸のティル・バルシプ（カルケミシュの南30km。現在のテル・アフマル）やオロンテス川中流のハマト（現在のハマ）など同じ前１千年紀前半におけるシリアの他の地域でも検証されているが[7]，アイン・ダラにおいては他の地域に比べて両文化の混淆の度合いがより濃厚である。

しかしアイン・ダラ遺跡を訪れる人のだれもが強い印象を受けるのは，神殿の前廊入り口の敷石に彫られている「足跡」である。

○神殿の四つの大きな足跡

石灰岩の敷石に彫られた「足跡」は長さ97cm もある巨大なものである。それも一つではなく，四つも彫られている。まず，入り口一番手前の敷石には左右両方の足跡がそろって彫られてい

る。次に，その1.7m先に，左足だけが彫られている。そして，最後に，前廊から本殿聖室への入り口の敷石に右足が同じ大きさで彫られている（図12，13a-b）。二番目の左足から三番目の右足までの距離，すなわち「歩幅」はおよそ10mもあって「足跡」が神的なものであることを暗示している。すなわち，神殿の入口から内奥に向かって進んでいく神の足跡である。では，その神はだれであったか。

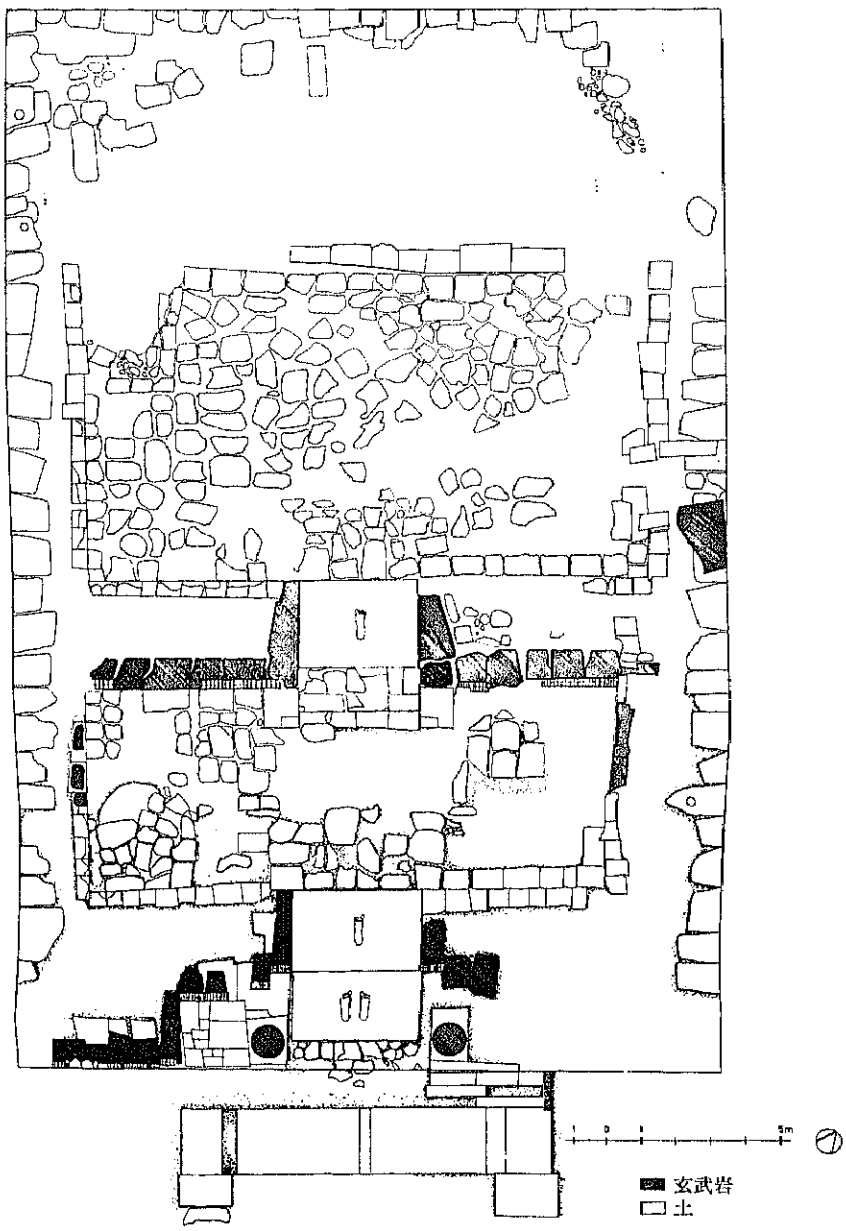


図12　アイン・ダラ神殿（部分）と「足跡」（A. A. Assaf, *Tell Ain Dara*, 1990）

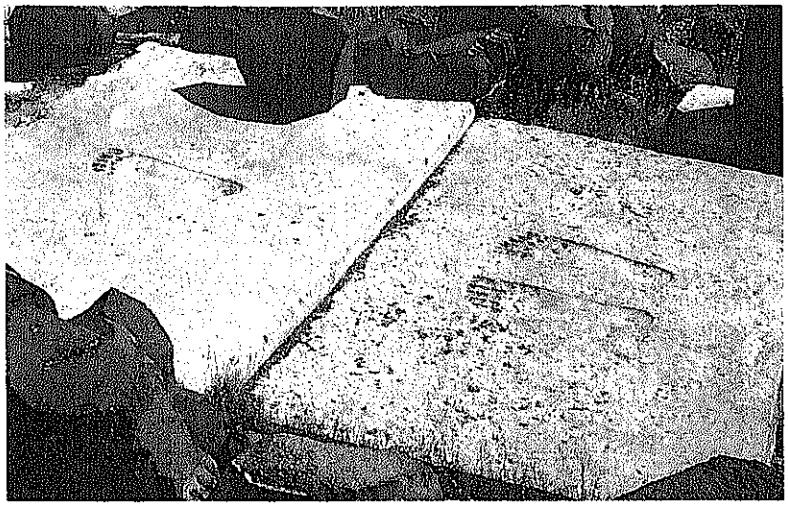


図13a　アイン・ダラ神殿入口の敷石に彫られた足跡（J. Monson, *BAR* May/June 2000）

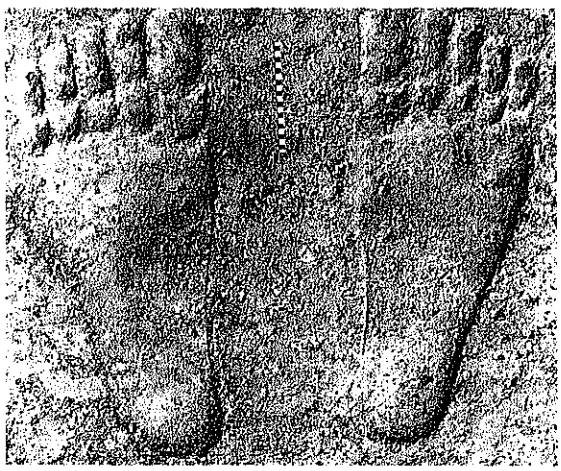


図13b　アイン・ダラ神殿入口の敷に彫られた足跡
（A. A. Assaf, *Der Tempel von Ain Dara*, 1990）

発掘者のアリ・アブ・アッサフ Ali Abu Assaf は，神殿はおそらくイシュタル女神の神殿であったと考える[8]。イシュタル（またはアシュタロト）は愛と豊饒の女神としてシリア・パレスティナで広く崇拝された[9]。　旧約聖書の記述ではシドン人（フェニキア人）とこの女神との結びつきが強調されている(列王記上11：5，同下23：13)。イシュタルは特にフェニキア北部の都市ビブロスの市民の間では「ビブロスの女主人」として崇められた[10]（図14参照)。イシュタルはしばしばライオン像で表現される。アイン・ダラの神殿跡からはいくつものライオンの彫像や浮き彫りに加えて，見事なアシュロト女神の浮き彫りも発見されている。

だが，浮き彫りに描かれた女神はヒッタイト風の先の尖った靴を履いており(図15)，敷石に彫られた裸足の足跡のイメージにはそのままは結びつかない。(より後代のアイン・ダラ出土のイシュタル像について図16参照)。そこでもう一つの可能性として考えられるのがハダド神であり，たとえばL・ステイジャーはこちらの説をとる[11]。ハダド（アッカド語のアダド，フリ語のテシュプ）は暑く長い乾季の後，雷鳴を轟かせながら恵みの雨を降らす嵐の神（天候神）である。古代シリアで広く礼拝され，豊饒神バアル（「主人」の意）と同一視された[12]。雨季における「風の門」（バーブ・エル・ハワ）はいわば嵐の神ハダドがアフリン渓谷に堂々入ってくるときの凱旋門である。黒雲や稲妻など自然の役者たちが演じる雨季到来告知の儀式は，アイン・ダラ神殿が建てられた当時も現代も少しも変わっていない。

ハダドを描いた像は稲妻を象徴する杖を手にしており(図17)，しばしば雄牛の背を台座にしている（図18)。ハダド神の修飾句「(雨）雲を駆ける者」が旧約聖書の詩篇68編5節ではヤハウェ神に対して用いられている。イスラエル北部のメギド付近にはハダド・リモン「雷鳴轟かすハダド」の聖所があった（ゼカリヤ書12：11参照)。

図14　「ビブロスの女主人イシュタル神」について記したフェニキア語碑文　前5世紀
(P. Bordreuil, "Astarté, la dame de Byblos" *AIBL* 1998)

図15　イシュタル女神浮彫り，アイン・ダラ出土

図16　イシュタル女神像。
アイン・ダラ出土
前550—330年
(A. A. Assaf, *The Tempel of Ain Dara*, 1990)

図17　稲妻を手にするハダド（バアル）神。
前２千年紀前半
(J. B. Pritchand, *ANEP*², 1969)

図18　雄牛の背に乗る嵐の神ハダド。
北シリア，ジェケ出土
前８—７世紀
(J. B. Pritchand, *ANEP*², 1969)

シリアで特にハダド神の中心聖所として知られていた場所はアレッポである。前853年，アッシリアの大軍を率いてシリアに侵攻したシャルマネセル３世はシリア同盟軍と戦闘を交わす前にアレッポ市内に入り，ハダド神に戦勝祈願の犠牲を献げている[13]。ハダド・エゼル（「ハダドは（わが）助け」の意）やベン・ハダド（アラム語のバル・ハダド。「ハダドの子」の意）は前10-８世紀のシリア南部のアラム・ツォバの王（サムエル記下８：３—８，10：１—19）やアラム・ダマスコの王たち（列王記上15：18，20：１以下，同下13：25）の名称として好んで用いられた[14]。最近イスラエル北部のテル・ダンから出土した前９世紀半ばのアラム語碑文にもハダド神はアラム・ダマスコの王の守護神として登場する[15]（図19）。

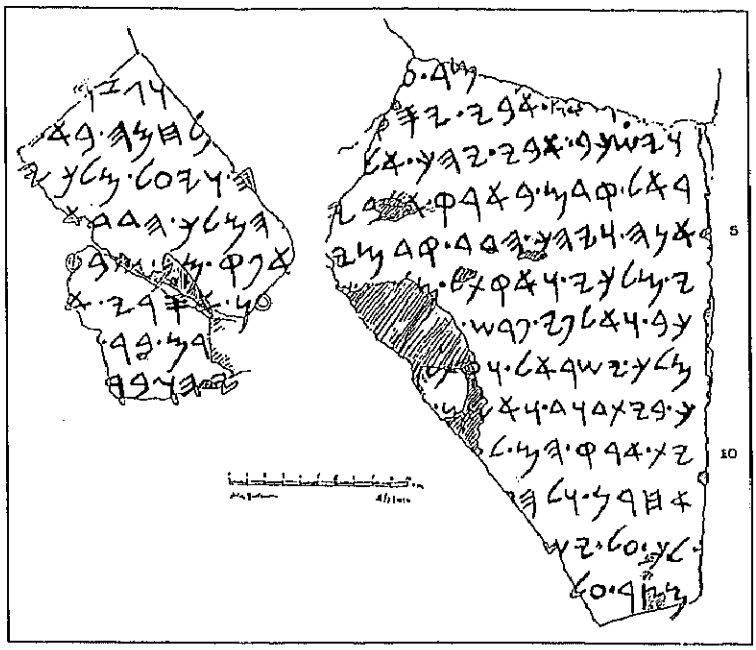


図19　ダン碑文　アラム語，前9世紀半ば
(A.Biran and J. Naveh. *IEJ* 45(1955))

○神殿設計者のイメージ

しかし，いずれの神のためのものであったにせよ，アイン・ダラ神殿の設計者は明らかに神が聖所に入って奥に進む情景を心に描きながら神殿を建てた。旧約聖書の詩篇にもイスラエルの神ヤハウェが門を通って聖所に入る情景が描かれている。

だれが上るのか，ヤハウェの山に。
だれが立つのか，かれの聖なる場所に。
両掌が潔白で心が清く
虚しいものにおのが魂を挙げず
欺瞞のために誓うことのない者。
彼は受ける，ヤハウェから祝福を
・・・・
門たち，頭を上げよ，
とこしえの扉たち，挙がれ，
栄光の王をお通しせよ。
栄光の王とは，だれか。

力ある勇士，ヤハウェ，
戦いの勇士，ヤハウェ。
門たち，頭を挙げよ，
とこしえの扉たちよ，挙がれ，
栄光の王をお通しせよ。

（詩編24：3—9）[16]

預言者エゼキエルも捕囚の地で見た幻に示された新しいエルサレム神殿の設計図とそのイメージについて記している。

「また彼は私を門に，東に向いた門に行かせた。すると，みよ，イスラエルの神の栄光が東の方からやって来た。その音は大水の轟きのようであり，地はその栄光によって輝いた。・・・・ヤハウェの栄光は，東向きの門を通って神殿に入った。

すると，霊が私を引き上げ，奥の中庭に私を導き入れた。なんと，神殿はヤハウェの栄光で満ちていた。

私は神殿の中から私に語りかける方の声を聞いた。私の傍らにはかの人が立っていた。

彼はわたしに言った，

『人の子よ，わが玉座の場所を，またわが足の置き場所を見よ。そこは，イスラエルの子らの中で，わたしが永遠に住もうとするところである』。」

（エゼキエル書43：1—7）[17]

○バアル・シャマイン——多宗教世界の中での普遍性

前述の通り，アイン・ダラの文化は他の地域と比べても複合的であり，神殿の浮き彫りは当時の人々が信仰していた神々の多彩さをよく物語っている（図20）。支配者たちが宗教や言語を異にする多様な住民を一つにまとめ統治することにいかに苦心したかは前9世紀後半のサムアル（アイン・ダラの西方）の王キラムワの碑文からも知ることができる[18]。

アラム系とヒッタイト系の両住民を抱えるハマトの地に北のルアシュの地も併合して複合的国家の王となったザクル（前8世紀初め）は，外敵からの解放に対する記念碑を地方神イルウェル Ilwer に捧げているが，その一方で彼は自分をハマトとルアシュの王に就けたのは神バアル・シャマイン Baal Shamayin のお陰であることを強調している。バアル・シャマイン（「天の主」の意）はシリア・パレスティナで広く崇拝されたエル El と同じく，数々の地方神をすべてまとめる地位にあった最高神である。イスラエルではヘブライの神ヤハウェがエルと同定された[19]。ザクルは統一国家の神として地方神イルウェルではなくより普遍的なバアル・シャマインの名称を用いたのである。

バアル・シャマインはバアル・シャメムの形でビブロスの王イェヒミリクの碑文（前10世紀）

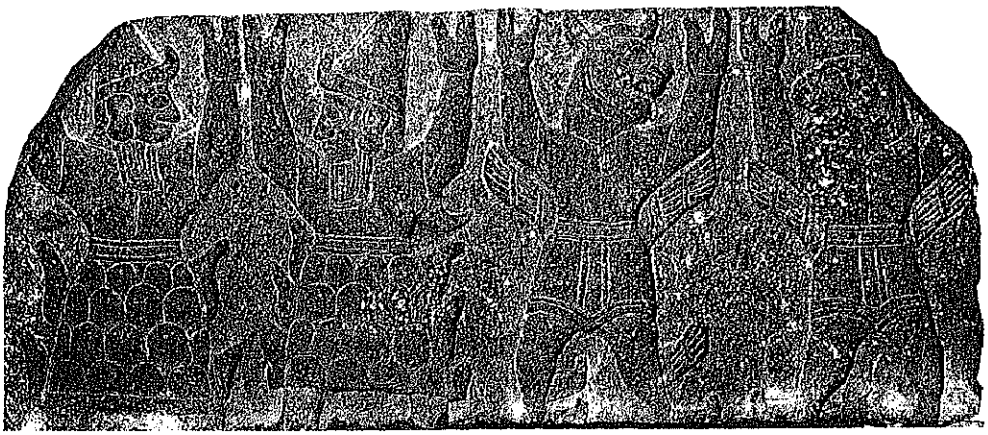


図20　神々の浮彫り　アイン・ダラ出土
(A. A. Assaf, *Der Tempel von Ain Dara*, 1990)

に登場し，旧約聖書ではエル・シャマイム（詩篇136：26「讃えよ天の神を/まことに，かれの恵みはとこしえに」）あるいはエロヘ・シャマイム「天の神」（創世記24；3，7，ヨナ1：9，エズラ1：2，ネヘミヤ1：4，2：4，20，歴代誌下34：24）として登場する。普遍的最高神はエルサレムではアブラハム時代からエル・エルヨン El Elyon「いと高き神」として敬われていた（創世記14：19）。

神々のまとめ役としての最高神の存在とその寛容性は，アイン・ダラのような多種多様な人種，宗教，言語が共生し混在する地域において特に強く求められたであろう。多宗教世界において風は最高神の普遍性や寛容性を象徴しその実体を示すものとして最もふさわしい。ヘブライ語やアラム語の「風」ルーアッハは空気，息，息吹，精神などの意も含む[20]。古代ヘブライの詩人や預言者は荒野の小さな風にささやく神の声を聞き（列王記上19：12—13），午後のそよ風に神の「足音」を感じた（創世記3：8，10）。

アイン・ダラ神殿の設計者は，参拝者がそこをいつ訪れても——全く無風の暑い夏の日でも——いと高き神の風や息吹を感じて「見る」ことができるようにした。彼は，神殿に入る神の風（息）を足跡の形で表した。神の息吹としての風の足跡である。

○風の足跡

アイン・ダラの神殿は前8世紀末におそらくアッシリア軍により破壊された。神殿の建物とその周囲を飾っていた動物や鳥の像の大半は頭部が失われるかひどく損傷を受けているが，それはアッシリア軍の行為によるものもあれば，その後の破壊活動によるものもあるであろう。長い間，廃跡の状態で放置され，様々な略奪や破壊行為はその後もめずらしくはなかったはずである。神殿の床に敷き詰めてあった平らな化粧石もほとんど失われてしまっている。

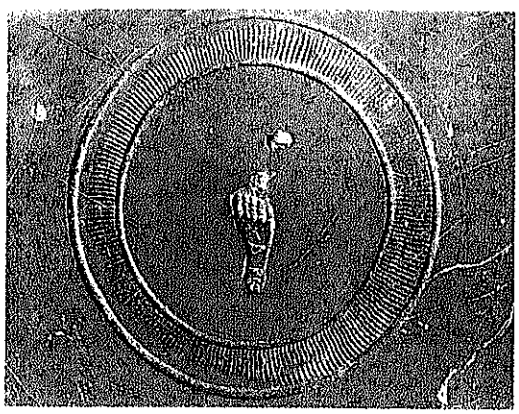
図21　人物像頭部　玄武岩　アイン・ダラ出土
(A. A. Assaf, *Der Tempel von Ain Dara*, 1990)

図22　人物像頭部　玄武岩　アイン・ダラ出土
(A. A. Assaf, *Der Tempel von Ain Dara*, 1990)

しかし，そのような長い破壊の時を経ながら足跡のついた敷石だけがきれいに残っていることはわれわれに単なる偶然以上のものを感じさせる。各時代の略奪者や破壊者たちも「足跡」にだけは手をつけなかった。彼らはそこに「聖なるもの」を感じたので手を触れずそのままにしたのではなかったか（図21，22)。

アイン・ダラ神殿が破壊されてから数百年経ったヘレニズム期の層から裸足の「右足」を模様にした赤釉の陶器（テラ・シギルタ）が見つかっている。明らかに神殿跡の「足跡」に刺激された芸術家の作品である[21]（図23)。「足跡」は人々の想像力をかき立てて止まない。

1997年，南アフリカ南部で11万7000年前の人類の足跡（約22センチ m）が発見されたとき，



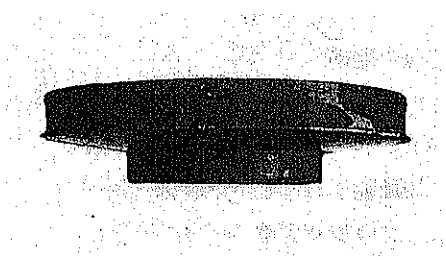


図23　足跡の模様のついた赤釉陶器（テラ・シギルタ），アイン・ダラ出土
前330—75年（A. A. Assaf, *The Tempel of Ain Dara*, pl. 7)

学者たちはそれを「エバの足跡」と呼んだ。人類の先祖はアフリカにいた一人の女性に遡るという仮説からのイメージである[22]。それより少し前の1993年夏に，アフリン渓谷南東部の洞窟で10万年前のネアンデルタール人の幼児の骨が日本の調査隊により発見されたが[23]，それもある意味で「エバ」の最初の子孫たちの足跡であるといえよう。

また，エルサレムのオリーブ山頂上に小さなドームがあり，中にはイエスが昇天したときに残したとされる足跡のついた石が置かれている。十字軍時代には両足の跡があったらしいが，今残っているのは左の足跡だけである。現在ドームはイスラム教徒が管理しているが，毎年，昇天日になるとキリスト教徒たちがその中庭に集まって祝典を行う[24]。

さらに，シリア・パレスティナ地方からは少し離れるが，スリランカ南部の聖山スリーパーダにも触れておきたい。スリーパーダとは「聖なる足跡」の意で，山頂（2,231m）にある足跡に由来する。興味深いのは，この足跡をめぐる地元の人々の理解とその多様性である。紀元5世紀ごろにはブッダの足跡として広く信仰されていたが，その後他宗教からも聖地として信仰されるようになった。ヒンズー教徒はシヴァ神の足跡であると信じ，イスラム教徒はアダムがはじめて地上に足を下ろした所であるとし，カトリック・キリスト教徒はアダムの足跡であるという[25]。こうして人々は現在，それぞれの信仰と思いをもって山頂の聖なる足跡に向かう。言い換えれば，足跡が多宗教の共生と寛容を取り持ち，支えているのである[26]。

厚い土と埃の層の中から，2000年以上もの長い眠りを終えて顔を見せたアイン・ダラ神殿は今ではただの遺跡としてあるだけである。しかし，ちょうど荒野に一本だけ生える木の陰が遙か古代から旅人にひと時の安息を与えてきたように[27]，アイン・ダラ神殿の敷石に残る四つの「足跡」はそこを訪れる人々の心の安らぎとなっている。それは宗教や民族の枠を超えた素朴な風の足跡である。

古代神殿は遺跡となることによって新たな普遍性と寛容性を身につけたのである。

注

1　A.Archi, "Agricultural Production in Ebla Region," *AAAS* 40 (1990), 50-55；脇田重雄・坂口はるみ・常木晃「古代地中海世界のオリーブ油生産――オリヴィエ・カロ著『北シリアの古代搾油施設』をめぐって」『古代文化』41（1989年）35―43頁；脇田重雄「東地中海世界における食糧生産第2次の波――テル・マストウーマ出土のオリーブから」『21世紀への考古学』雄山閣　1993年，335―345頁；池田裕「オリーブとテラ・ロッサ――北シリアの遺跡調査に参加して」『基督教論集』37（1994年）83-101頁参照；和田久彦「第2植物性食糧生産――東地中海世界における果樹栽培の始まりと展開：オリーヴを中心に」常木晃編『食糧生産社会の考古学』朝倉書店　1999年，200-215頁。

2　クルド人は現在のシリア，トルコ，イラク，イラン4国の国境にまたがる山岳地域に古くから住む民族で，アラビア語ではなくイラン語系言語のクルド語を話す。

3 H・シャンクス編『死海文書の研究』ミルトス　1997年；池田裕『死海文書 Q&A』ミルトス　2000年参照。

4 池田裕『列王記』(旧約聖書 VI) 岩波書店　1999年，35—56頁参照。

5 D.Ussishkin, "Solomon and the Taynat Temples," *IEJ* 16 (1966), 104-110 参照。

6 A.A.Assaf, *Der Tempel von Ain Dara* (Damaszener Forschungen 3), Mainz am Rhein 1990 ; idem, "Die Kleinfunde aus Ain Dara," *Damaszerner Mitteilungen* 9 (1996), 47-111 ; J.Monson, "Solomon's Temple and the Temple at Ain Dara, Syria," *Qadmoniot* 29 (1996), 33-38 (in Hebrew) ; idem, "Ain Dara Temple. The New Closest Solomonic Parallel," *Biblical Archaeology Review*, May/June (2000), 25-35, 67.

7 J.D.Hawkins, *Cambridge Ancient History* III/1, Cambridge 1982, pp. 372-441 ; Y.Ikeda, "Hittites and Aramaeans in the Land of Bit Adini," in PrinceT.Mikasa (ed.), *Monarchies and Socio-Religious Traditions in the Ancient Near East*, Wiesbaden 1984, 27-36.

8 注 6 参照。

9 メソポタミアでは天体女神的および戦争女神的性格が強調された。G. Leick, A.Millard,"Astarte," in P. Bienkowski and A.Millard, *Dictionary of the Ancient Near East*, London 2000, p. 40 ; J. Burnett, "Ashtoreth," in D.N.Freedman et al (eds.), *Erdmans Dictionary of the Bible*, Michigan -Cambridge 2000, p. 114f. G.Fohrer「アシタロテ」『旧約・新約聖書大事典』教文館　1989年，44頁参照。

10 P.Bordreuil, "Astarté, la dame de Byblos", *Academie des inscriptions & belles-lettres*, 1998 Novembre-Decembre, 1153-1164 参照。

11 L.E.Stager, "Jerusalem as Eden," *Biblical Archaeology Review*, May/June 2000, 44.

12 ハダド神について F・M・クロス（興石勇訳）『カナン神話とヘブライ叙事詩』日本基督教団出版局 1997年，64，65，75，109頁；小板橋又久「ウガリト語の神話・祭儀文書に見られる音の世界」『史境』43（2001年），40—52頁参照。

13 A.K.Grayson, *Assyrian Rulers of the Early First Millennium BC II (858-745)*, Toronto, Buffalo, London 1996, p. 23. Cf. J.D.Hawkins, *Reallexikon der Assyriologie* IV, Berlin-New York 1932 p. 53 (s.v. Halab) .

14 前853年にオロンテス川東岸のカルカルでシリアの王たち（イスラエルのアハブ王も含む）を率いてシャルマネセル 3 世の軍隊と戦ったアラム・ダマスコのベン・ハダド 2 世はアッシリア語碑文ではアダド・イドリ（ハダド・エゼル）として記されている（Grayson, op.cit. p. 23f.)。A・マラマット「アラム人」D・J・ワイズマン編（池田裕監訳）『旧約聖書時代の諸民族』日本基督教団出版局 1995年，201—228頁；Y.Ikeda, "Looking from Til Barsip on the Euphrates : Assyria and the West in Ninth and Eighth Centuries B.C." in K.Watanabe (ed.), *Priests and Officials in the Ancient Near East*, Heidelberg 1999, pp. 276ff ; Sh. Yamada, *The Construction of the Assyrian Empire : A Historical Study of the Inscriptions of Shalmaneser III (859-824 B.C.) Relating to His Campaigns to the West*, Brill, pp. 59ff.参照 。

15 池田裕「光は北から——テル・ダン碑文と新アラム語碑文の発見」『筑波大学　地域研究』13 (1995年)，1—17頁。この論文出版後同碑文の別の断片が発見された (A.Biran and J.Naveh, "The Tel

Dan Inscription: A New Fragment," *IEJ* 45 (1995), 1-18)。山田重郎「テル・ダン出土のアラム語碑文とアラム・イスラエルの関係」『日本の神学』5 (1999年), 118—136年参照。

16 松田伊作『詩篇』(旧約聖書 XI) 岩波書店 1998年, 57—58頁。

17 月本昭男『エゼキエル書』(旧約聖書 IX) 岩波書店 1999年, 180頁および巻末解説参照。

18 H.Donner and W.Röllig, *Kanaanäische und aramäische Inschriften* II, Wiesbaden 1968, pp. 30-34. 石田友雄「Y'DY-サムアル王キラムワの碑文に照らしてみたソロモンの王位継承」『オリエント』27 (1984), 1—12頁; Yamada, op.cit. p. 109 参照。

19 Donner and Röllig, op. cit. 204-211; Grayson, op. cit., p. 205. Cf. Ikeda, "Looking from Til Barsip on the Ehphrates,"p. 282; H.Sader, *Les êtats araméens de Syrie*, Beirut 1987.

20 池田裕『旧約聖書の世界』(岩波現代文庫) 岩波書店 2001年, 66頁以下参照。

21 A.A.Assaf, *Damaszener Mitteilungen* 9, p. 67, Tafel 17 no.31; idem, *Temple of Ain Dara*, Syria (出版年記載無し), p. 8 and plate 7.

22 1997年8月16日朝日新聞掲載記事参照。

23 発掘者たちによれば, アフリカで生まれた人類は豊かな食物に恵まれた死海地溝(アカバ湾からアフリン渓谷にかけての地域) を最初の回廊として利用して拡散移住していった (赤澤威「現代人の起源—デデリエ洞窟発見の幼児骨をめぐって」ORIENTE 11 (1995年), 3—16頁)。

24 E.Hoade, *Guide to the Holy Land*, Jerusalem 1973, pp. 312f.; H.I.Canetti (text) and H.Isachar (photography), *Images of the Holy Land*, Israel (出版年記載無し), pp. 105f.

25 鈴木正崇「スリランカの山岳信仰と聖地」小西正捷・宮本久義編『インド・道の文化史』春秋社 1995年, 167—177頁。

26 キリスト教とイスラーム教と中心とする多宗教間の対話と共存の可能性を論じた最近の研究として塩尻和子「宗教多元主義とイスラーム」『宗教研究』329 (2001年), 247—272頁参照。

27 Y.Ikeda, "Because their Shade is Good—Asherah in the Early Israelite Religion," in E. Matsushima (ed.), *Official Cult and Popular Religion in the Ancient Near East*, Heidelberg 1993, pp. 57-80 参照.